

生活科学部本館の改修 (第Ⅰ期)が終了しました

昨年九月から行われていた生活科学部本館の改修工事(第Ⅰ期)が、今年二月に終了しました。

昭和七年に建設されたこの建物は、全面スクラッチタイル張りで、正面には人造石のレリーフが装飾されており、本学のシンボリックな建物となっています。今回の改修は建物全体の半分となりましたが、最新の設備を取り入れ機能向上を図りながら、伝統ある建物の雰囲気が残る建物へと生まれ変わりました。

▲右側が改修部分。窓枠、レリーフ、雨どいの色が異なるのがわかります。

大学会議室(右上)は、建設された当時から貴賓室として皇室をはじめ、各要人の応接に利用されてきました。改修では、貴賓室の雰囲気を保つため、絨毯や壁紙が復元製作されています。また、階段教室(右下)も女子高等師範学校当時の趣を残した教室となりました。中庭(左上)の枝垂れ桜はそのままですが、掲示板、スロー



プ、ベンチが新設され、学生や教職員の憩いの場となりました。芝生と煉瓦との境界線には、工事で撤去された床材が再利用されています。生活科学部食物栄養学科に管理栄養士養成課程が設立されたことに伴って、給食実習室(左下)が整備されました。改修に際し、学内から植栽計画アドバイザーとして山下貴司理学部教授と建築アドバイザーとして田中辰明生活科学部教授が参加され、さらに、学外アドバイザーとして東京工業大学大学院の藤岡洋保教授(日本建築学会建築歴史・意匠委員会メンバー)をお迎えしました。

藤岡学外アドバイザーからのコメント

国立大学法人では、お茶の水女子大学生活科学部本館(一九三二)のように戦前の建物を保存活用するのはまた例外的なので、その「先駆性」が注目される。国立大学法人にとって、キャンパスを整備することは大学のプレゼンスを示す意味で重要で、その一環として歴史的建造物を保存活用することは、その大学の歴史や個性をアピールする点でも意義があると考えられる。

この建物には、一九三〇年代の高等教育機関の本館の特徴、具体的には、左右相称の平面・立面、中央玄関部の強調が見られる。それらは威厳の表現を意識したものである。なお、当初の窓は、現状とは異なり、縦長が二連になった窓だった。

研究室面積を前より狭くはできなかったためにパイプ・スペースを廊下側に設置せざるを得なかったのは残念だが、残せる材料はできるだけ残そうとしたこと、フロアリングや階段の段板に木を使い、樞を銅製にするなど、当初の状態の再現に配慮したことは評価してよい。



▲設備配管はガラススクリーンの中へ

今後は、生活科学部本館の残り半分と微生物堂の改修が予定されています。